

ついこの間のことである。私はあるところで「こよみ」を見せてほしいといった。すると「こよみ」とはあなたらしくもない。運勢でも調べるのですかと問われた。来月の某日が何曜日になるかを見たいのだと答えると、それならば「カレンダー」で間に合うでしょうというのが、ある。私はなるほど「カレンダー」かなと思ったが、いくぶんか呆気にとられた。もともと私自身も郵便を投函する必要のあるとき自動車の運転手に「郵便函があつたら留めてくれ」といおうか「ポストがあつたらストップしてくれ」といおうか、どっちがよくわかるだろうかと咄嗟に迷うことがある。

「パパ、ママ」排撃を事新しく持ち出すわけではないが、外来語の横行もこんなになってくると深く考えさせられる。もう七年前になるがヨーロッパ滞在から私が帰朝した昭和四年の春、新聞記者が来て何か感想はないかというので、私は往來を歩いてみても到るところ看板その他に英語が書いてあつてまるでシンガポールかコロンボか、そういう植民地のような印象を受ける、新聞をちよつと読んでも外来語があとからあとへ出てきて何だか恥かし

く思うというようなことを述べた。記者はあまり面白くない感想だといった顔をしながら万年筆を走らせていた。しかし足かけ九年ぶりに日本へ帰ってきた当時のことであるから、故国の文化に対する私の印象はかなり新鮮なものではあつたと思う。それ以来、私は筆をとつても特に止むを得ない場合のほかはなるべく外来語を用いないことにしている。

一昨年夏のことであつた。夕方ふらりと上野公園から根岸の方へ歩いて行つてみると「根岸盆踊」という広告が方々に貼つてあつた。やがて広場に出ると囃子のやぐらや周囲の踊場が提燈や幕で美しく飾られていた。踊はまだ始まつていながつたが老若男女がかなり集まつていた。私には少年時代に父に伴われて有馬温泉の近在で見た盆踊のことが懐しく思い出された。するとすぐわきに「蠅取デー 七月二十日」という掲示がチラリと目についた。この貼紙一つで情調がすっかり破られてしまつた。「デー」は如何にも醜惡である。沢瀉久孝博士をして「何デー」「何デー」「ナンデー」「ナンデー」「ナニヲ云ッテヤガルンデー」、日の神の「日」という美しい言葉を持